

### 環境エンリッチメントとは ～動物園の果たす役割～

小菅正夫<sup>†</sup> (旭川市旭山動物園名誉園長)



動物園は実に3000年以上の歴史を持ち、その時々  
の社会的要請に合わせて果  
たすべき役割を変化させな  
がら今日まで命脈を保ち続  
けてきた。19世紀半ばから  
起こった近代動物園の発  
展は、その果たすべき役割  
を明確にしたことによると  
ころが大きかったと考えている。その役割とは、レクリ  
エーション、研究、教育、自然保護の4つの使命を果た  
すことである。特に、中世貴族階級の動物園の中で、生  
き残った動物園は一般市民に公開されたものだけであ  
った。つまり、近代動物園は市民の健全なレクリエーシ  
ョンの場として捉えられていたのである。

ところが、20世紀後半になると、人々の楽しみのため  
に野生動物を飼育して良いのかという批判が一部で広  
がり、動物福祉の観点から動物園廃止論まで出始めた。  
そういった世論に対抗するように、動物園は希少野生動  
物の研究や保護増殖事業、そして展示を通して、野生動  
物を育む多様な自然環境の重要性を訴えるようになった。  
しかしながら、どのような正当な目的を主張したと  
しても、“動物が可哀想”というイメージを払拭するこ  
とはできない。

そこで、我々は飼育動物の“幸せな生活”について考  
えた。その際、彼らの何が不幸なのかを分析することか  
らはじめた。野生に比べ、飼育下では外敵に襲われない  
安全が確保されている。病気からも、もっとも悲惨な飢  
餓からも守られている。その結果、飼育動物は圧倒的な  
長寿を保証されているのである。それでも、彼らは“可  
哀想だ”と観られている。それは何か、彼らに生活感  
がないからである。つまり、安全を自らが確保し、食べ  
物は自らが取って生きているという、野生動物として当  
たり前の暮らしがないことがそう見られる原因であると気

付いた。

環境エンリッチメントの基本はそこにある。まず第一  
に、生活スタイルを尊重すること。二番目は、自分自身  
の居場所を彼らが選定できること。第三に、彼らの能力  
が遺憾なく発揮できるような飼育環境を創り出すこと。  
これらを組み合わせて、飼育下の生活環境を豊かにする  
ことが環境エンリッチメントである。

オランウータンやヒグマのように単独生活をするもの  
は単独で、チンパンジーやエゾシカのように群れ生活を  
するものは群れで飼育することが重要である。生活ス  
タイルを無視した飼育は、彼らに最大限のストレスを与  
えるので、避けなければならない。

居場所の選択も彼らにとっては大問題である。ニホン  
ザルのさる山には、岩山ばかりでなく高さ12mの塔を  
用意してあり、サルたちは危険があるとすぐに岩山や擬  
木に登って危険を回避することができる。その安心感が  
彼らに自由な地上行動を発揮させるのである。ヒョウ  
も、野生では常にライオンやトラと遭遇する危険性があ  
るため、安心して休める場所を樹上に求めた。その樹上  
へ駆け上がる行動や樹上でゆったりと寝ている姿を真下  
から観察できるようにしても、彼らには何のストレスも  
与えない。

最後に、能力の発揮であるが、彼らの能力は危険回避  
と採食行動において極めて強く発揮される。危険回避に  
ついては、さる山やヒョウの例のように彼らの本能的習  
性を利用するだけで、現実には危険を作り出すことは動物  
福祉の観点からもできないことは自明である。しかしな  
がら採食行動については、さまざまな手法が考えられ  
る。

キツツキは舌をどのように動かして餌を採るのか。キ  
リンは長い首ばかりでなく長い舌を使って器用に木の葉  
をむしって食べるとか、ニホンザルは小さな穀類をチッ  
プの中からどのようにして発見するのか、それらの行動  
はすべて彼らが野生での生活で活用している能力であ

<sup>†</sup> 連絡責任者：小菅正夫

〒078-8235 旭川市豊岡五条11-3-13 ☎0166-37-3303 E-mail : kimunkamuichichi@yahoo.co.jp

る。また、その能力は個体が修練して獲得したものではなく、長い進化の過程で種として獲得した能力なのである。つまり、その行為が必要な環境を作りさえすれば、彼らは即座にその行動をやっつけのけるのだ。これが旭山動物園の言う“行動展示”である。決して個体の努力によって獲得した特殊な能力を展示しているのではない。

ペンギンは水中を飛ぶように泳ぎ、アザラシは好奇心旺盛にマリンウェイを通過する。オオカミは遠吠えをし、エゾシカは崖を駆け上る。ホッキョクグマは獲物を狙うかの如く水中に飛び込み、オランウータンは高さ16mの空中散歩を楽しんでいる。

入園者の様子を観察していると、明らかな変化が見られてきた。一つは歓声である。それも「うわー、凄い」というもので、動物の印象が“可愛い”から“凄い”へと変わった。次に“生き生きしている”、“目が輝いている”、そして我々が目標にしていた“動物たちが幸せそうね”という声も多数聞かれている。

実は、これらのことが動物園にとって最も重要なことなのだ。多くの人々が、野生動物の魅力に惹かれ、彼ら

との共生を望んでくれなければ、野生動物は絶滅の危機から救われないと思う。人間はこれまで開発という大儀で、自分らに必要なとしないものを容赦なく駆逐してきた。野生動物たちもその対象であった。これまで、人に害を為す、人の役に立たない、気持ち悪い、などの理由で積極的に生き物を駆除してきたことは歴史に明らかである。その結果が、現在の地球環境を創ってきた。そして、その地球環境もこれからは急激に変化することが予測され、そのことによる人類への影響が心配されるようになってきた。今こそ、これまでの生活スタイルを変更する時である。指標は野生動物の存在が解りやすい。動物園で観た畏敬すべき多くの野生動物を育む自然環境を保全しなければ、近い将来彼らの多くが絶滅してしまうだろう。そうならないように多様な自然環境を保全することが“自分にとって”必要であると考える人の数を一人でも多くする、それが動物園の最大の役割である。そのためにも、動物園の飼育動物は、あくまで幸せでなくてはならない。